

巻頭言 COVID-19 による社会変動に伴うメンタルヘルス

中込 和幸
国立精神・神経医療研究センター

COVID-19 によるパンデミック以前からメンタルヘルスサービスへのアクセスは偏見やスティグマ等が障壁となって不十分なものであったが、パンデミック後には、感染予防対策のため医療機関や介護施設におけるサービスが制限され、利用者も対人接触による感染リスクのためにアクセスを差し控える傾向が強まっている。その上、自らが感染する恐れ、他人との接触を避けて自宅に閉じこもりがちな生活を余儀なくされるなど、通常的生活習慣が失われ、さらには職場の倒産、失業者も増えて、多くの国民は強いストレスに曝されている。一方、COVID-19 による直接的な症状として、せん妄、焦燥、脳卒中などの精神神経症状が現れることも報告されている。すなわち、メンタルヘルスサービスへのニーズが高まっている時期に、アクセスを困難にする条件が重なっている状況であり、その解決に向けた施策の立案及び実践は喫緊の課題と言える。

* * *

さらに人を対象とする臨床研究においても、検査や治療行為に伴う接触による感染拡大のリスク軽減のため、研究参加者は減り、その進捗は著しく遅延している。

こうした負の状況を少しでも改善するために、医療や研究の場に ICT を活用したリモートアクセスが取り入れられるようになり、従来、病院や研究機関に患者さんが来なければ実施できなかった生体検査についても、少なくとも一部に関しては、在宅で実施可能なウェアラブルデバイスを用いた評価法の技術的進歩が見られ始めている。こうした流れは、COVID-19 のパンデミック以前から、医療機関へのアクセスが困難な地域が多いことや、検査室でない実生活の中での生体情報が得られる可能性があることなどを考えると、パンデミックが落ち着いてからも続くものと思われる。

* * *

ICT を活用した実生活に即した生体情報の取得やリモートアクセスを用いた中央評価システム等によって、生物学的精神医学の臨床研究領域にもたらされる恩恵はきわめて大きい。しかし、そのためには、さまざまなウェアラブルデバイスや中央評価システムの信頼性や妥当性の検証及び精度の向上を図ること、ビッグデータを扱えるバイオインフォマティクスの育成、個人情報保護や倫理的課題の取り扱い等、多方面からの課題に対して、産学連携体制を構築して、精力的に取り組む必要がある。

* * *

一方、治療に関してはいかがだろうか。スマホを介した CBT やそれに AI を取り込んだもの、オンラインによるリハビリ等、非接触型の治療技法の開発が進められている。ただ、本当に対面式 (face to face) の治療は必要ないのか、必要だとするとどのように組み合わせるべきなのか、こうした疑問にも AI が答えてくれるのだろうか。